

見比峠の尾先白左衛門（小柿）

むかし、むかしのことや。

小柿村の人は、小野村へ行ったり来たりしておった。ただ、見比峠を通らなければ行けんのや。この道は、木がおうように茂っている細い坂道なもんで、昼間も薄暗い。きつねが住んでいて、よう人をだましておった。帰りが遅くなると、たいてい化かされた。夜はこわくてよう通つたんだ。

あるとき小柿村の正太郎さんが、小野村に嫁いでいる娘のところへ、お祝い事があるというので呼ばれていった。

夕方になつたので、急いで帰ってきよつたんや。峠にさしかかつたころには、もう、日も暮れて薄暗くなつてき。引き出物を持っているので、心して通らんといかんと心いながら、峠道を急いでおつた。

すると、右へ折れるところで、前方に白装束の巡礼が歩いていて。

「もし、巡礼の方。どちらに行かれるのですか。」

「吉兵衛さんを訪ねていくところです。」

「それなら、うちの近所ですな。よかつたらご一緒いたしましよ。」

ということと一緒に歩いた。少し行つた所で今度は左へ曲がる。そこには石がいくつもあつて、一休みできるようになつていた。

巡礼が小用を足したいと言い、荷物を下ろしてその先へ行つた。仕方なく正太郎さんは石に腰を下ろした。ご馳走も入っている引き出物を横の石の上に置いて、やれやれと足をさすつていた。

ところが、なかなか巡礼が戻つてこない。だんだんと気になりだした。

「もし、巡礼の方。」

と声をかけても返事がない。用を足しに行つた方へ近寄つて、声をかけた。しかし、返事がない。いぶかしく思つて、腰を下ろしていたところに戻つて、思わず叫んだ。

「あつ。引き出物も巡礼の荷物もない。やられた！」

そうか、あの巡礼は尾先白左衛門であつたか……。」

この見比峠のきつねは、大きな図体しておつた。年とともに尾の先が真っ白になつてきた。だから、いつのころからか、尾先白左衛門と呼ばれるようになった。

正太郎さんの話を聞いた村人たちは、尾先白左衛門が人をだますのがうまくなってきたことを知り、いつそう用心するようになった。

「きつねごときに何を言うとする。よし、退治してやる。」
と思っている元気な若者がいた。町へ行く用事ができて、その日がやってきた。帰りにきつねが喜びそうなものをみやげに選び、それを持って峠までやってきた。

夕暮れが過ぎて薄暗くなった。細い峠道をひと曲がり、何もない。ふた曲がり、出てこない。

でも、その先の石のところに巡礼がいるのが見えた。
ははん、出た。出た……。

「もし、巡礼の方どちらに行かれるのですか。」

「吉兵衛さんを訪ねていくところです。」

「ご近所ですな。では、ご一緒しましょう。」

巡礼が腰を上げて歩き出した。若者は今とばかりに後ろのひもをぎゆうつと引っぱった。なんとそれは、きつねのしっぽだった。

「ぎゃん。」

と悲鳴を上げたものの、きつねはもとの姿にもどった。若者はしっぽをもってふりまわそうとしたが、かえってふり

飛ばされてしまった。その勢いで、池へぼちゃん！ ずぶぬれになって、村へもどってきた。

これを聞いたもう一人の元気な若者が、

「よし、それならおれがやってやる。」

と出かけていったが、また、ずぶぬれになって帰ってきた。

それからとい

うもの、村の人

は、尾先白左衛

門に出会わない

ように気をつけ

るようになった

た。どうした

かつて？

それは、見比

峠は明るいうち

に通るといふこ

とさ。

